慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一次世界大戦時のシュテファン・ツヴァイクによる「愛国的」執筆活動とその展開
Sub Title	Stefan Zweig's "patriotic" writing activities and their development during World War I
Author	杉山, 有紀子(Sugiyama, Yukiko)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2024
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	シュテファン・ツヴァイクが第一次世界大戦中、特にその初期において戦時文書課(Kriegsarchiv)を中心に行った執筆活動を研究課題とした。当時のツヴァイクによるテクストのうち、全集として刊行されているものはごく一部で、近年それに加えて少数のテクストが新たに書籍化されたが、多くは戦時中に出版されたきり未公刊となっている。本研究では既刊のテクスト全般と関連する二次文献の収集・読解に加え、ドイツおよびオーストリアの図書館にて当時の出版物を閲覧・収集し、掲載誌や書籍全般の性質にも目を配りながらテクストの分析を進めた。 ツヴァイクは戦争初期において愛国的・戦争肯定的な態度を取っており、1916～17年を境に反戦へ転じたとされてきた。本研究においては当時の文学者たちの活動や出版物の状況を二次文献から明らかにするとともに、ツヴァイクが戦争初期に書いたテクストのうち近年初めて書籍化された新聞等掲載の工ッセイの読解、および戦時文書課からの出版物の調査と掲載テクストの分析を行った。その結果、ツヴァイクの戦争肯定から絶対平和主義への「転向」は必ずしも全面的な転換というわけではなく、むしろ平和主義への「転向」以前のテクストにおいても後年の平和主義に通じる要素が少なからず見いだされることが明らかとなった。戦争に対する精神論的な称揚やショーヴィニズム的言説等は当時においても少なく、その一方で普遍的ヒューマニズムに基づく人命重視論、プロパガンダ批判、過度な憎悪への非難など、後の反戦論で前面に出てくる思想の断片が、戦争の比較的早い時期において既に登場している。この点を中心に近く論文にまとめる予定である。今後はこれらのモティーフが具体的に複数のテクストを通してどのように用いられ、最終的に平和主義的作品へとつながっていくかをさらに詳細に分析するとともに、ツヴァイクと並んで書籍や雑誌に掲載された他の作家との比較、戦時文書課からの他の出版物との関連にも目を向け、「プロパガンダ的」とされる執筆活動がツヴァイクの作家としての発展の中にいかに位置づけられるか、引き続き考察を深めていく。 The subject of this research was the writing activities of Stefan Zweig during World War I, especially in the early stages, mainly in the War Archives Division (Kriegsarchiv). Many of the texts from those years remain unpublished after WWI. So, in addition to collecting and reading previously published texts and related secondary literature, I also browsed and collected publications from the time at libraries in Germany and Austria, paying close attention to the nature of the magazines and books in general, and analysed them. This research has shown that Zweig's "conversion" from affirmation of war to absolute pacifism is not necessarily a complete change as it has been said; rather, even in the texts that preceded his "conversion" to pacifism, there are elements that are common to later pacifism. There are very few praises of the war or chauvinistic statements. On the other hand, ideas such as the emphasis on human life based on universal humanism and criticism of propaganda are similar to his later anti-war arguments. This study will continue to analyze in more detail how these motifs are used through multiple texts and ultimately lead to pacifist works. I will also look at comparisons with other writers, and the relationship with other publications from the Kriegsarchiv, and how his writing activities, which are said to be "propaganda-like", can be positioned in Zweig's development as a writer.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2023000010-20230133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2024年12月13日

2023年度　学事振興資金（個人研究）研究成果実績報告書

研究代表者	所属	理工学部	職名	専任講師	補助額	100千円（C）
	氏名	杉山 有紀子	氏名（英語）	Sugiyama, Yukiko		

研究課題（日本語）

第一次世界大戦時のシュテファン・ツヴァイクによる「愛国的」執筆活動とその展開

研究課題（英訳）

Stefan Zweig's "patriotic" writing activities and their development during World War I

１．研究成果実績の概要

シュテファン・ツヴァイクが第一次世界大戦中、特にその初期において戦時文書課(Kriegsarchiv)を中心に行った執筆活動を研究課題とした。当時のツヴァイクによるテクストのうち、全集として刊行されているものはごく一部で、近年それに加えて少数のテクストが新たに書籍化されたが、多くは戦時中に出版されたきり未公刊となっている。本研究では既刊のテクスト全般と関連する二次文献の収集・読解に加え、ドイツおよびオーストリアの図書館にて当時の出版物を閲覧・収集し、掲載誌や書籍全般の性質にも目を配りながらテクストの分析を進めた。

ツヴァイクは戦争初期において愛国的・戦争肯定的な態度を取っており、1916～17年を境に反戦へ転じたとされてきた。本研究においては当時の文学者たちの活動や出版物の状況を二次文献から明らかにするとともに、ツヴァイクが戦争初期に書いたテクストのうち近年初めて書籍化された新聞等掲載のエッセイの読解、および戦時文書課からの出版物の調査と掲載テクストの分析を行った。その結果、ツヴァイクの戦争肯定から絶対平和主義への「転向」は必ずしも全面的な転換というわけではなく、むしろ平和主義への「転向」以前のテクストにおいても後年の平和主義に通じる要素が少なからず見いだされることが明らかとなった。戦争に対する精神論的な称揚やショーヴィニズム的言説等は当時においても少なく、その一方で普遍的ヒューマニズムに基づく人命重視論、プロパガンダ批判、過度な憎悪への非難など、後の反戦論で前面に出てくる思想の断片が、戦争の比較的早い時期において既に登場している。この点を中心に近く論文にまとめる予定である。今後はこれらのモティーフが具体的に複数のテクストを通してどのように用いられ、最終的に平和主義的作品へとつながっていくかをさらに詳細に分析するとともに、ツヴァイクと並んで書籍や雑誌に掲載された他の作家との比較、戦時文書課からの他の出版物との関連にも目を向け、「プロパガンダ的」とされる執筆活動がツヴァイクの作家としての発展の中にいかに位置づけられるか、引き続き考察を深めていく。

２．研究成果実績の概要（英訳）

The subject of this research was the writing activities of Stefan Zweig during World War I, especially in the early stages, mainly in the War Archives Division (Kriegsarchiv). Many of the texts from those years remain unpublished after WWI. So, in addition to collecting and reading previously published texts and related secondary literature, I also browsed and collected publications from the time at libraries in Germany and Austria, paying close attention to the nature of the magazines and books in general, and analysed them. This research has shown that Zweig's "conversion" from affirmation of war to absolute pacifism is not necessarily a complete change as it has been said; rather, even in the texts that preceded his "conversion" to pacifism, there are elements that are common to later pacifism. There are very few praises of the war or chauvinistic statements. On the other hand, ideas such as the emphasis on human life based on universal humanism and criticism of propaganda are similar to his later anti-war arguments. This study will continue to analyze in more detail how these motifs are used through multiple texts and ultimately lead to pacifist works. I will also look at comparisons with other writers, and the relationship with other publications from the Kriegsarchiv, and how his writing activities, which are said to be "propaganda-like", can be positioned in Zweig's development as a writer.

３．本研究課題に関する発表

発表者氏名（著者・講演者）	発表課題名（著書名・演題）	発表学術誌名（著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月（著書発行年月・講演年月）